『ガリヴァー旅行記』を読む

北　垣　宗　治

1

『ガリヴァー旅行記』*Gulliver's Travels* (1726) は18世紀英文学で一番面白い作品である、と言っても言い過ぎではあるまい。一般にこの作品は子供のための読み物だと受け取られやすい。確かに『ガリヴァー旅行記』には子どもの想像力をかき立てる要素があり、子ども向きに書き直され、絵本として出版され続けている。小人の国に流れ着き、砂浜の上で縛られたまま横たわっているガリヴァーの姿は、子どもの脳裏に焼き付き、永遠に消えることはないであろう。しかし、作者のスウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は、この作品を子どものために書いたわけではない。これは旅行記の形を取った痛烈な諷刺文学なのであり、大人こそが読まなくてはならない作品である。『ガリヴァー旅行記』の主人公であるレミュエル・ガリヴァー (Lemuel Gulliver) は、ある意味で典型的なイギリス人であることも重要なポイントである。

英文学の歴史において、17世紀の終りから18世紀の初めにかけての半世紀間に書かれた散文物語で最もよく読まれてきた作品を三つ上げるとすれば、先ずJohn Bunyan の *Pilgrim's Progress*『天路歴程』(1678)、次にDaniel Defoe の*Robinson Crusoe* (1719)、そしてこのエッセイの主題である *Gulliver's Travels* (1726) ということになる。これら三つの作品は、すべて半世紀以内に出版された。しかもこれら三作品には面白い共通点がある。それは、どの作品でも主人公が旅をするというパターンを持っていることである。バンヤンの『天路歴程』ではクリスチャンという主人公が亡びの町を逃れ、天上の町ザイオンをめざして旅をする。ロビンソン・クルーソーは英国を飛び出して南アメリカのブラジルに渡り、４年間にわたって農園を経営して成功するが、労働力の不足に悩み、同業者から誘われて、アフリカのギニアまで黒人を買いに出かける途中、海上で大嵐に会い、船は壊れ、ただ一人生き残って無人島に辿りつく。ロビンソン・クルーソーは奴隷売買という非人道的な仕事に手を出そうとしたが、嵐のお蔭でそれを妨げられたイギリス人なのである。彼はその無人島で28年2か月と19日を過ごしたのち、幸運にも通りかかった船に救われてイギリスに帰ってくる。

バンヤンの『天路歴程』は宗教性の強い寓意物語であり、主人公は重荷を負うて旅を続けるクリスチャンという男である。彼は道中さまざまな人に出会いながら、うっかり「失

望の沼」にはまりこんで救出されたり、「死の陰の谷」を歩いて魑魅魍魎に妨げられたり、「虚栄の市」では投獄されたりする。彼はこの世で出会う困難、誘惑を勇気と信仰をもって克服し、ついに永遠の都に入るのである。

他方『ロビンソン・クルーソー』の方はリアリズムに徹した物語であって、この作品にはモデルがあった。すなわちAlexander Selkirkというスコットランド人がたった一人で漂流して無人島に辿りつき、そこで４年４か月すごしたという記録があり、デフォーはそれを種本に用い、無人島の滞在記録を７倍近く引き伸ばしてロビンソン・クルーソーのフィクションを書き上げた。この作品には、ありそうもないことは何一つでてこない。真実らしさを身上とするリアリズムの物語なのである。『ロビンソン・クルーソー』は、日本でも幕末に翻訳が出た。膳所藩の優れた蘭学者、黒田麹盧がオランダ語訳の『ロビンソン・クルーソー』を日本語に訳したのである。その訳本を興奮しつつ読んだ若者の一人が、若き日の新島襄であって、新島はこの物語を読むことによって海外への夢を掻き立てられ、ついに函館から幕府の禁令を犯して海外への脱出をはかったのであった。新島はロビンソン・クルーソーの物語をロビンソン・クルーソーという実在の人間の自叙伝のつもりで読んでいたほどである。

では『ガリヴァー旅行記』はどうなのか。それは四つの航海記で構成されている。第一の航海はリリパット国、すなわち小人の国への渡航記。第二の航海はブロブディンナグ国、すなわち巨人の国への渡航記。第三の航海は五つの雑多な国々、すなわち空飛ぶ島ラピュータ、科学者たちが奇想天外な研究に耽っているバルニバービ、不死人間のいるラグナグ、死者を２４時間だけ甦らせることのできる魔法使いの国グラブダブドリッブ、及び日本への渡航記。第四の航海はフイーヌム国、すなわち理性的な馬の国への渡航記。ガリヴァーが訪れる国々は、日本を除くと、すべて架空の国である。架空の国の物語だから荒唐無稽であるかというと、決してそうではない。ガリヴァーの旅はいきあたりばったりのでたらめ物語ではないのである。作品の背後には作者スウィフトのしたたかな計算が働いている。それは諷刺的戦略と言ってもよい。では、何に対する諷刺だったか。答は、人間それ自体を対象とした、痛烈な諷刺、ということになるのである。

ついでに付け加えると、スウィフトは『ガリヴァー旅行記』に、なぜ日本という実在の国を入れたのか。これは実に興味深い問題である。すでにイギリス人ウイリアム・アダムズ(William Adams, 1564-1620) が日本に辿りつき、徳川家康に仕え、彼の消息は本国に伝えられていた。しかし日本は英国から余りにも遠く、限りなく架空の国に近かったとも言える。ガリヴァーは航海のたびに祖国に帰っていく必要があったのであり、彼が長崎からオランダ船で帰国するのは帰国の方法としてまことしやかなものにひびく。スウィフトはこうして日本を利用したのである。ガリヴァーは日本の「皇帝」から親切に待遇され、江戸から長崎まで旅をする。しかし日本に関する記述は極めて少ない。東海道五十三次に

ついて、何ひとつ観察を残していない。しかしスウィフトが沢山の航海記を読み、それを巧妙に活用したことは明かであり、『ガリヴァー旅行記』全体に「日本」が反映しているという読み方すらも可能なのである。(Philip Williams, Maurice Johnson, Muneharu Kitagaki, *Gulliver's Travels and Japan: A New Reading* [Doshisha Amherst House, 1977] 参照)

ところで、『天路歴程』、『ロビンソン・クルーソー』、『ガリヴァー旅行記』という三つの作品のどれもが旅の形式を取っていることは、非常に重要なポイントであると私は考える。旅は人生を象徴する。私たちの人生は旅である。私たちは生れ落ち、幼年期、少年期、青年期、壮年期、老年期をすごし、ついに最期を迎えるわけで、その間沢山の人に出会い、沢山の苦しみをなめ、誘惑に負けたり、得意になったり、失恋したり、病気になったり、絶望に陥ったり、失敗と成功を繰り返しながら生きていく。「人生行路」という言葉があるが、これまた人生は旅であることを表している。世界文学で最も有名な作品には、旅の形式を取るものが少なくない。古代ギリシアのホメロスの作品と伝えられる『オデッセイ』もまた、トロイ戦争終結後、トロイ遠征軍の大将の一人、オデッセウスがさまざまな苦難を経て、故郷のイーサカに帰っていく旅の物語であった。ダンテの『神曲』も旅の形式を取っているし、ゲーテの『ファウスト』も、戯曲でありながらファウストの旅と見なすことができる。

日本語のコトワザに「可愛い子には旅をさせよ」がある。これは旅のつらさ、旅の苦労が人間を鍛えることを暗示する。人間は旅を通して成長する。人間は旅の終点に立つ時、旅の出発点にいた時よりもはるかに高い次元に立って人生を振り返ることになる。オデッセウスもダンテも、クリスチャンも、ロビンソン・クルーソーも、ファウストもみなそうである。敢えて仏教の言葉を使えば、彼らは旅の終りにおいて、それぞれ「安心立命」(あんじんりゅうめい) の境地に入ったのである。信仰によって心の帰趨が定まり、身を天命に任せ、生死利害に処して泰然たる境地を獲得したといえる。ところが、ガリヴァーだけはそうでない。小人の国、巨人の国、ラピュータを初めとする不思議な国々、そして馬の国を歴訪したのち、イギリスに帰ってきたガリヴァーはまったく失意の人であり、環境不適応の人になっており、もっとストレートにいえば、精神異常者になっていたのである。これが『ガリヴァー旅行記』の大きな特色であるといえる。なぜそういうことになったのだろうか？　その点を追求してみたい。

2

私は先ず、ガリヴァーを典型的なイギリス人として認識するものである。周知のように、ガリヴァーが最初流れ着いた小人の国はリリパット (Lilliput) と呼ばれる島国である。この島国の北北東にブレフスキュ (Blefuscu) というもう一つの島国があり、そこの住民も

やはり小人である。リリパットとブレフスキュは長年にわたって対立抗争してきたのみならず、当時は戦争状態にあった。ブレフスキュの港には国中の艦船が集結し、いつでもリリパットに攻め入る準備が出来ていた。リリパットはいうなれば、未曾有の国難に直面していたのである。ガリヴァーはこれまで世話になったリリパットの皇帝に恩返しをするために、一つの名案を思いつく。この国でガリヴァーは普通のリリパット人の十二倍の背丈をもつ巨人だったから、彼の巨大な体と力を活かして、ブレフスキュの艦船をごっそりぶん取ってくることを思いついたのである。

ガリヴァーは先ず、彼の望遠鏡でひそかにブレフスキュの港に停泊している軍艦の数を数えてみたところ、約五十隻あることがわかった。彼は五十本の頑丈な縄を編み、それらの端をひとまとめに束ねて棒に結び合わせた。彼はそれを引っさげて海峡を渡っていった。大体のところは足が底に届くほどの深さだったが、海峡のまんなかあたり三十ヤードほどは泳がなくてはならなかった。ブレフスキュの軍艦に乗っていた水兵たちは、途方もない巨人が近付いてくるのをみて驚愕し、一斉に海に飛び込んで陸地に逃げていった。ガリヴァーは五十隻の軍艦一つ一つに縄を結び付ける作業に取り掛る。浜辺からはブレフスキュ兵の一斉に射る矢が雨あられのように飛んできて、彼の顔や腕に当たる。五十隻全部をつなぎとめたので、いよいよそれをまとめて引っ張ろうとしたが動かない。そこでガリヴァーは水中に潜り、錨を切ってまわる。こうして彼は五十隻の軍艦を一まとめにして沖へ引っ張って行く。リリパットの海岸では、皇帝を初め、宮廷人や軍人たちが今か今かと彼の帰りを待っていた。ガリヴァーが莫大な数の艦船を一挙にぶん取って帰ってきたのをみて、リリパットの人々の興奮は最高潮に達した。皇帝はガリヴァーの偉大な功績をたたえ、その場でナーダックという、国中で最高の爵位を与えた。リリパットは、これで外敵に攻撃される危険性がなくなり、枕を高くして寝ることができるようになったのである。

ところで、それから何が起こったか？　リリパットの皇帝はすぐにまたガリヴァーを呼んで、もう一つ頼みを持ち出した。それは、もう一度ブレフスキュまで出掛けて行って、まだ残っている他の艦船を一切合切拿捕してきてほしい、という要望だった。皇帝は、そうすることによってブレフスキュを完全に屈服させてリリパットの属領とし、皇帝の任命する総督にこれを統治させ、皇帝は全世界の唯一の絶対君主として君臨したい、という野心を持っていたのである。しかしガリヴァーはこの案に賛成できなかった。政策の点からいっても正義の点からいっても、それはよろしくない、いやしくも自由で勇敢な国民を奴隷の境遇に陥れようというような計画には、自分としては力を貸すわけにいかない、と明快に主張したのである。彼は皇帝の帝国主義的な野望の手先になることを拒否した。私はここにガリヴァーのイギリス人気質を見る気がする。

ここで反論する人があるかも知れない。本来イギリスというのは帝国主義的な国ではなかったのか、と。世界史の教えるところでは、たしかに大航海時代が始まって以来徐々に、

そして18世紀と19世紀には熾烈に、ヨーロッパの列強は海外の領土獲得競争に狂奔してきた。はじめスペインとポルトガルがその競争に先鞭をつけたが、後にはイギリス、フランス、オランダ、ベルギーといった国々が覇を競うようになり、結局この領土獲得競争に大勝したのはイギリスであり、大英帝国の領土には二十四時間、日の沈む所がないといわれる時代を築き上げた。しかし20世紀の第二次世界大戦終結を境として、イギリスの海外植民地は次々に独立していき、現在に至っている。

イギリスというのは面白い国である。早くも13世紀の初めにおいて、絶対君主制というものに貴族たちが団結して対抗し、国王に「マグナ・カルタ」をつきつけて署名させ、国王の権力を制限することに成功した。二大政党制を最初に発達させたのもイギリスだった。言論の自由、結社の自由、出版の自由をしぶとく追求してきたのもイギリスだった。なかでも、良心の自由を尊重する伝統を築き上げてきたのがイギリスなのである。ガリヴァーとしては、これ以上リリパット皇帝の帝国主義的野望に荷担することは、彼の良心が許さなかった。私はそういうガリヴァーに典型的なイギリス人を見る者である。

少し脱線することになるが、20世紀の前半に活躍した作家の一人にE. M. Forster という人がいる。彼は「私の信条」というエッセイの中でこのように述べている。「もし私が自分の国を裏切るか友人を裏切るかのどちらかを選ばねばならぬとすれば、自国を裏切るだけのガッツを持ちたいものだ」と。しかもフォースターはこの信念を実証するような筋書きの小説を書いたのである。それが『インドへの道』(*A Passage to India* [1922-4])という作品であり、これは二十世紀英文学の古典に数えられる傑作である。この小説では無実の罪で起訴された一人のインド人を助けるために、一人の良心的なイギリス人が、インドの一地方都市に住むすべてのイギリス人同胞を敵にまわして戦うという話が中心におかれている。私には、「イギリス人魂」というのは、そのようなものに思えて仕方がない。

話をもとへ戻すと、ガリヴァーがリリパットの皇帝の帝国主義に抵抗したのは、イギリス人魂の発露であった、というふうに私は理解するのである。ところでガリヴァーはリリパット国でもう一つ皮肉な経験をする。ある晩宮中の建物に火事が起り、王妃の宮殿が焼けそうになった。火を消すのに援助を求められたガリヴァーは、小人たちのバケツで火事を消しとめようしたが、焼け石に水。その時彼は前夜飲んだぶどう酒のせいで急に尿意を催してきたのをさいわい、自分の体から出る液体で、炎上しつつある宮殿にねらいを定め、見事に火事を消し止めた。背の高さが一般のリリパット人の十二倍もある巨人にしてはじめて可能なわざであった。宮殿の火事を消し止めたことは、彼のもう一つの功績だった。しかしリリパットの法律では、皇帝の宮殿の敷地内で放尿したものは死刑に処することになっていた。リリパット皇帝は、場合が場合であるだけに、この法律をガリヴァーに適用することはないと伝えさせたが、宮廷内には皇后をはじめ、ガリヴァーのやったことにひどく立腹している人々が居り、ガリヴァーの立場は不利になっていった。

ガリヴァーの敵たちは、なんとかしてガリヴァーを亡き者ににしたいと相談した。そのためにすでに三つもの大罪を彼が犯したとして糾弾し始めた。①ブレフスキュの残りの艦船すべてをぶん取ってこいという皇帝の命令に背いた罪。②厳しい規定があるにもかかわらず、皇居の敷地内で放尿した罪。③講和条約締結のためにやってきたブレフスキュの大使たちを個人的に招いて歓待した罪。こういう大それた反逆罪の故に彼を死刑にすべきことが真剣に論じ合われた。ただしリリパットの皇帝は立場上、慈悲を示す必要もあり、死刑を一等減じて、両眼失明の刑でよかろうということにした。実はガリヴァーは、リリパットではあまりにも巨大な生き物であるために「人間山」と呼ばれていたが、もしも人間山を死刑にしてしまうと、その死体をどのように処理したものか、名案がなかったのである。ガリヴァーを埋めるだけの巨大な穴を掘る方法がない。彼らの力でそれを掘っていくうちに、死体が腐りはじめ、手をつけられないような公害が発生することは確実だったのである。そこで、死刑にするかわりに、両眼を突いて失明させる、という処罰に決まった。しかしガリヴァーに好意を持つ一人の宮廷人がこのことをいちはやく彼に告げてくれたので、ガリヴァーは官憲が逮捕しにくるのを出しぬいて、かねて招待を受けていたブレフスキュへ泳いで渡り、大歓迎を受けたのだった。彼がイギリスへ帰国するのは、このブレフスキュの島からである。

3

ガリヴァーはイギリスに帰って妻子と暮らすが、2か月もすると、「他国を見たいという、飽くことを知らない欲望がまたもや鬱勃として起り、もうどうにも我慢できなく」(平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』、岩波文庫、p.100。本稿では以下、この文庫版により、ページのみを示す)なった。こういう衝動に駆られたのは何もガリヴァーだけではなく、ロビンソン・クルーソーもまったく同じである。そこでガリヴァーはまたもや船医として船に乗り込むのだが、航海の途中、ある島に上陸して探検しているうちに、仲間たちが命からがら逃げだし、ガリヴァーだけがその島に残されてしまう。それがブロブディンナグ(Brobdingnag)という巨人の国だった。彼は巨人の農夫につかまってしまい、その家に連れていかれた。この巨人はガリヴァーの背丈の十二倍あったから、身長で比較する限りでは、リリパット人対ガリヴァーの関係は、ガリヴァー対ブロブディンナグ人の関係に等しいわけである。

ガリヴァーは語学の天才である。彼はリリパットではリリパット語を余り苦労せずに習得し、会話が自由にできるようになった。この巨人の国ブロブディンナグにおいても同様で、彼はブロブディンナグ語を懸命になって覚えた。彼を捕まえた巨人は農夫だったが、その娘のグラムダルクリッチ (Glumdalclitch) がガリヴァーを可愛がり、彼の世話係となり、ブロブディンナグ語を教え込んだのだった。身長が普通人の十二分の一しかない小人

であるガリヴァーは隣近所で評判になり、沢山の人が見物にやってきた。そのうちにこの農夫は、ガリヴァーを見世物に出して金儲けをすることを思いつき、町々を興行してまわる。ガリヴァーとしては見世物になることはたまらなくいやだったが、世話になっている以上は致し方ない。さいわいどこに行くにもグラムダルクリッチが世話係りとしてついてまわり、面倒を見てくれた。

ガリヴァーの評判はこの国の宮廷にまで達し、王妃が彼を農夫から高額で買い上げた。さいわいグラムダルクリッチも世話係として宮殿の中に住むことを許された。しかし巨人の国に住むたった一人の小人であるガリヴァーには、常に危険がいっぱいあった。犬ほどの図体をしたネズミに驚かされたり、猿につかまって死ぬような思いをしたり、スープの池にはまったりして、大変な目に会った。しかしこの巨人の国で重要であるのは、国王とガリヴァーがかわした対話である。国王は学問のある人で、哲学と数学に通じていた。国王は三人の偉大な哲学者を招き、「自然」(Nature) はなぜガリヴァーのような、普通人の十二分の一というような不自然なものを創造したのか、という問題を考えさせたのであった。

「自然」について、一言注釈を加える必要があろう。17世紀から18世紀前半にかけて、ヨーロッパの知識人たちは自然について、現代人とは相当ちがう見方をしていた。現代人は自然といえば山や海や空や風などを思い浮かべる。『広辞苑』の定義を引用するならば「人力によって変更・形成・規整されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいでた状態」である。ところがスウィフトの時代では、自然というのは神の創造したもので、秩序あるもの、理性的なもの、人間の従うべき規範と考えたのである。従って、Alexander Pope のようなスウィフトの同時代人が「自然に従え」という場合、それは「宇宙を支配する神の秩序に従え」ということであり、「理性の声に従え」という意味になる。しかし現代人の場合「自然に従え」は、「本能に従え」と同じ意味と受け取る人が多いであろう。

『ガリヴァー旅行記』に戻ると、巨人国の王が、自分の背丈の十二分の一にすぎない小人のガリヴァーを見て、秩序立てられているはずの自然が、どうしてこういう自然に反するものを生み出したのかを、哲学的に問おうとしたことは、興味深いことである。巨人国の哲学者たちは頭をひねって考えたが、結局理性的な答を出すことができず、要するにこれは「自然の戯れ」(Lusus Naturae) である、ということで一致した。理性で割り切れない時、理性によって解決ができない場合、哲学者はしばしば「自然の戯れ」という中途半端な、答にならない答でもってお茶を濁すことを、スウィフトは見事に皮肉ったのであった。

ブロブディンナグと呼ばれる巨人国の物語で注目すべき点は、国王とガリヴァーの間でかわされた問答である。王は相当な知識人で知的好奇心が強く、ガリヴァーに向かって「ヨーロッパの風俗習慣、宗教、法律、政治、学問」(141) 等についていろいろ質問する。ガリヴァーの方でも懸命に質問に答えていき、特に自分の祖国イギリスの「貿易、海陸に

おける戦闘、宗教上の分裂抗争、政党問題等について」(141) は、自分自身でもいささかしゃべりすぎたと思うほど、愛国者的な誇りをもって説明していく。この問答は一日に数時間ずつ、五日間続けられたというから、相当なものである。王はメモを取りながら、熱心に聞き入り、六日目にはまとめて質問と反論を展開した。王はなかなか鋭い質問を出し、時にはガリヴァーが愛国心に駆られて自分の国を実際よりも持ち上げて説明したことが暴露されていく。たとえば王の質問の一つはこういうものだった。「国会議員になるということは、非常に骨も折れるし金もかかる、しかも俸給も出なければ年金も出ない、したがって家計は破産に追い込まれることもしばしばだ、とお前は言っていたが、そうだとすればどうしてみんなは血相を変えて議員になりたがるのか」(176)。ブロブディンナグ国王のこの疑問は、現在の日本の国会議員にも適用できる厳しい批判となっている。

この国王はイギリス国民に関してこんな結論を出している。「お前の話や、わたしが無理矢理お前から引っぱり出した答えから判断すると、お前の国の大多数の国民は、自然のお目こぼしでこの地球上の表面を這いずりまわることを許されている嫌らしい小害虫の中でも、最も悪辣な種類だと、断定せざるをえないと思うのだ」(181)。

このように知力にすぐれ、英邁で、鋭い分析のできるブロブディンナグ国王だが、この国王にも奇妙な弱点があることをガリヴァーは見逃さない。ある日国王はこんな命令を全国に出した。それは、海岸の見張りをこれまで以上に厳しく行い、もしも外国船が現われ、それにガリヴァー同様の背丈の小人の女が乗っていたならば、即座に捕らえて首都に護送せよというものだった。つまりその女をガリヴァーにあてがって、子供を作らせ、国中に売りだそうという計画だった。ガリヴァーとしてはそんな恥辱を蒙るくらいなら、死んだほうがましだと考え、なんとか一日も早く自由の身になりたいものだと切望した。ガリヴァーのこの願いは思いがけない仕方でかなえられる。ある日突如として、ガリヴァーの入れられていた籠が大きな鷲にさらわれる。鷲はその籠の中の生き物を食べようと思ったのだろう、空に舞いあがり、海の上まで追っかけてきた他の鷲との空中戦となり、鷲はあわててその籠を海の上に落としてしまった。籠の中に閉じ込められたまま海上を漂っていたガリヴァーは、首尾よくイギリス船に救助されて、帰国したのであった。

4

『ガリヴァー旅行記』の第四航海はフイーヌム (Houyhnhnmn) と呼ばれる、馬の国の物語である。フイーヌムというのは、日本人の耳に「ヒヒーン」と聞こえる馬の鳴き声に基づいて、作者スウィフトが作った言葉である。(平井教授は「フウイヌム」と書かれるが、私は「フイーヌム」と書くほうが「ヒヒーン」に近いと考えるので、そのように書かせていただく。) フイーヌムの国の馬たちは完全に理性的な動物であり、平和で秩序のあるユートピアを形成している。この馬たちは、礼儀正しく、親切で、隣人愛に富み、争

うことは一切しない。ガリヴァーが最初に出くわし、彼を世話してくれることになった馬の親切により、彼はフイーヌムの言葉を学んでいくが、語学の天才であるガリヴァーは素早くフイーヌム語を覚えてしまう。フイーヌム語の特色の一つは、「ウソ」に相当する言葉がないということだった。フイーヌムたちはウソをつくことを知らないからである。従ってウソという概念を伝えるには「ありもしないこと」という、まわりくどい言いまわしに頼るしかない。

フイーヌムの社会は厳密に一夫一婦制を守り、夫婦は愛し合っているので、その社会に不倫は一切存在しない。一対の夫婦は雄と雌の子馬を一匹づつもうけると、それ以後はもはや夫婦の交わりをしない。ただし子馬の一匹が何かの事故で死んだりすると、その場合だけは交わりを再開し、子供を作るわけである。雄の子馬が2匹になると、その場合は雌の子馬を2匹持っている家と交換してバランスを取ることになる。またフイーヌムの国では子馬が結婚適齢期に達すると、すべて親同士の取り決めによって結婚させる。子供のフイーヌムは親の取り決めに何一つ逆らわずに従う。フイーヌムの家庭では子供は二匹ずつときまっているので、国内の人口はコンスタントに保たれ、増えもせず、減りもしない。フイーヌムたちは清潔で、この国には病気というものが一切ない。フイーヌム国はまさしくユートピアなのである。

ところでこのフイーヌムの国には人間の形をした、毛むくじゃらで、すばしこくて、貪欲で狡猾で好色な野獣がいる。この野獣は、ヤフーと呼ばれている。(現在インターネットを使う人で「ヤフー」というプログラムの厄介にならない人はないだろうが、この「ヤフー」という言葉はスウィフトが『ガリヴァー旅行記』の中で作った言葉なのである。)ヤフーは理性的な馬であるフイーヌムの国に住んでいる、人間の形をした野獣である。端的に言えば、この国では馬が理性的動物で支配者であり、人間はたちの悪い野獣の家畜なのである。ガリヴァーはヤフーという動物の醜悪さを嫌悪する。ヤフーは実にいやなにおいを発する。しかし彼はどうも自分自身とヤフーの格好が同じであることを気味悪く思っている。またガリヴァーに親切にしてくれるフイーヌムの主人の方でも、ガリヴァーの体つきはヤフーそっくりであるのに、彼の皮膚はなめらかで、しかもヤフーと違って理性があり、フイーヌム語をどんどん覚えて会話もできることに驚きを感じている。

ガリヴァーはフイーヌムの家で世話になりながら、毎日主人のフイーヌムと会話を交わすことを楽しむようになる。そしてフイーヌムの道徳的な完璧さ、高潔さを知るにつれて、フイーヌムに対する尊敬の念と愛情が深まっていき、やがては自分もフイーヌムの一員として、この島に永住させてもらうことを願うようになる。フイーヌムの主人はガリヴァーにいろいろと質問し、ガリヴァーがそれに答えていくうちに、いつしかガリヴァーは祖国の人間をヤフーと同一視するようになり、もうあのいまわしい人間というヤフー社会には帰りたくないと思うようになった。

フイーヌムの主人とガリヴァーの交わした会話の中で特に面白いのは、衣服をめぐる会話である。フイーヌムにはガリヴァーがその国のヤフーとちがって、体を衣服で覆っていることが不思議でならない。そこで主人は、なぜそんなもので体を覆っているのかと、その理由を尋ねる。それに答えてガリヴァーは、自分の国では誰もが衣服で身を包むのが慣習であるが、信頼して下さるあなたのことだから、何なら喜んで裸になってご覧にいれましょう、ただし自然が隠せと教えている箇所だけはご勘弁願いたい、と言う。するとフイーヌムは、お前はおかしいことを言う。自然が与えておきながら、それを自然が隠せというはずはないではないか、と言った（331）。現にフイーヌムは自然が与えたままの姿をしており、服を着たり、パンツをはいたりしていない。

このエピソードが示すことは、フイーヌムとガリヴァーでは「自然」の理解が正反対であると言うことである。旧約聖書の創世記にエデンの園におけるアダムとエバの物話がある。アダムとエバとは、神から、園の中央に生えている木の果実は絶対に食べてはいけないと、厳しく禁じられていた。しかし彼らはヘビにそそのかされて、禁断の木の実を食べたのだった。すると目が開け、自分たちが裸であることがわかって恥ずかしくなり、彼らは無花果の葉を綴り合わせて腰に巻いたという。この創世記の神話が示すことは、フイーヌムたちは禁断の木の実を食べる以前のアダムとエバと同じく無垢の状態にあるということであり、ガリヴァーは禁断の木の実を食べて、神の戒めに背いた後の、いわば罪に染まったアダムである、ということになる。

ガリヴァーは主人のフイーヌムの要望に答えて、イギリスの状況を説明していく。巨人の国ブロブディンナグの王に対してイギリスの説明をした時のガリヴァーは一種の愛国者で、イギリスに誇りを抱き、イギリスを実際よりも一層良い国であるかのように説明する傾向が顕著だった。しかしフイーヌムの国では、もはやイギリスに対する誇りを失ったかのように、ガリヴァーはイギリスの人民、社会、制度、等の欠点を洗いざらいさらけ出していく。

フイーヌムの主人はガリヴァーに向かって、ある国が他の国に対して戦争を仕掛けるのはどういう原因や動機によるのか、その点を説明するように求める。ガリヴァーは、戦争の原因や動機は沢山あるけれども、主なものを挙げると、君主の野望が戦争を始めることもあるし、場合によると、君主に対する人民の怒りや不満をそらすために戦争を始める君主がいたりする。しかし次のような説明も付け加えている。「時には、相手の君主がもしかしたら戦いを仕掛けてくるかもしれないという疑心暗鬼から、こちらからその君主に一戦を挑む君主もいる」（345）。この箇所は、21世紀になってもそのような動機から戦争が始まることを先取りして予言しているかのように読めるではないか。このように『ガリヴァー旅行記』には21世紀にもなお通用するような鋭い観察が含まれているのである。

ガリヴァーは更に話を進めて、戦争のときに人間がどんな風に振舞うかについて説明を

続ける。彼は戦争とそのむごさを説明するのに次のような単語やフレーズを羅列する。「大砲、重砲、小銃、カービン銃、拳銃、弾丸、火薬、剣、銃剣、攻城、退却、攻撃、奇襲坑道、対敵坑道、砲撃、海戦、千人の乗組員もろともに沈没した艦船、敵味方双方に出た二万人の死者、断末魔の呻き声、四方八方に飛び散る四肢、黒煙、阿鼻叫喚、混乱、馬蹄による圧死、敗走、迫撃、勝利、犬や狼や猛禽の食うがままに放置された死屍累々たる戦場、略奪、強奪、強姦、焼討ち、破壊等々」(347)。聞いているフイーヌムはほとほとうんざりして、もう止してくれ、胸が悪くなってきた、「理性の所有者だと称している者がこれほどの残虐行為を犯しうるとすれば、その理性の力は完全に腐敗堕落しきっていて、単なる獣性よりもさらに恐るべきものとなっているのではないか」(348) と、あきれ果ててしまう。

フイーヌムの主人はさらにガリヴァーから、人間世界の弁護士たちの悪辣さ、政治家たちの狡猾さとずうずしさ、貴族たちの無知と堕落と気まぐれと傲慢と好色性などの話を聞き、いわゆる人間というものが、理性を持つとはいうものの、この国のヤフーの性質をそっくり備えていることを認識する。ガリヴァーはそのような人間世界に帰っていくことを嫌悪するようになり、この称賛おくあたわざるフイーヌムの世界に永住することを心から願うようになる。

ある日のこと、ガリヴァーにとって何とも恥ずかしいアクシデントが起こった。引用してみよう。「護衛にいつもついてきてくれる例の栗毛の馬と一緒に外出した、或る日のことであった。その日は凄く暑くて、すぐ近くにあった川に入って水浴びがしたくなり、彼にどうだろうかと相談した。構わないだろう、ということで、早速着ているものを脱いで素っ裸になり、流れの中へそっと入っていった。ちょうどその折、堤のかげに立っていた雌のヤフーが、こちらのしぐさを一部始終見ていた。(中略) それこそ情欲に燃えたのであろうが、猛烈な早さで駆けてくるなり、私が水を浴びている場所から五ヤードと離れていない所に飛び込んできた。この時ほどびっくり仰天したことは、私の生涯で他にはなかった。護衛の馬は、私が危い目にあっているなどとは夢にも思わず、かなり離れたところで草を食べていた。雌のヤフーの奴は，実にいやらしい格好で、私に抱きついてきた。私は必死になって大声をあげて叫ぶと、馬は大急ぎで駆けつけてくれた。ヤフーは仕方なくというか、しぶしぶと私を掴んでいた手を放し、反対側の岸に上がっていった。そこでもまた、じっと立ちどまったまま，私が衣類を身につける間じっとこちらを見つめて唸り声をあげていた」(378)。

この話を聞いてフイーヌムの主人とその家族は大笑いしたとあるが、ガリヴァー自身にとっては笑うどころではなかった。さかりのついた雌ヤフーに抱きつかれたということは、ガリヴァーがどれほど否定しようとも、彼自身が完全にヤフーであることを決定的に証明することになったからである。

それからしばらくして、ガリヴァーは更に残念な事態に直面する。おりしもフイーヌム国の、四年に一度の大会議が開かれ、ガリヴァーの世話をしている主人も議員としてそれに出席した。大会議での最大の問題は、ヤフーをこの地上から一切抹殺してしまうべきかどうかという、繰り返し議論されてきた問題だった。そういう議論が続くうちに、ヤフーという畜生を家族の一員のように養っている議員がいるのはけしからんという話になり、彼はそのヤフーを他のヤフー同様にこき使うか、もとの国に帰させるか、どちらかにすべきだということになった。この議論が力を得たのは、理性の片鱗を示すというそのヤフー、つまりガリヴァーが、他のヤフーをそそのかして、平和であるべきフイーヌムの社会に大反乱を起こすかもしれないから、ということだった。主人のフイーヌムは、ガリヴァーは決してそんなことをするはずがないと大いに弁明したが、押しきられてしまった。

この決定を聞かされてガリヴァーは絶望したが、どうすることもできず、結局この国を立ち去ることになる。小船を作り、手製の帆で走れるようにし、世話になったフイーヌムたちに見送られて海に漕ぎ出した。何日か経ってようやくポルトガルの船に救われた。船長のペドロ・デ・メンデスはガリヴァーを親切に扱い、イギリスに帰れるように世話をしようと約束してくれた。しかしガリヴァーはイギリスに帰りたい気が少しもしない。それに船員たちのにおい、つまりヤフーのにおいが気になり、とても彼らに近付く気もしなかったから、できるだけ船員たちから離れて船の片隅にいた。こうしてガリヴァーはリスボンに到着し、そこからイギリス船に乗って帰国したのである。

自分の家に入ると、いきなりガリヴァーの妻が飛びついてきて彼をしっかりと抱き、接吻した。ながらく人間に触れたことがなく、その感触を忘れていたガリヴァーは，忽ち気を失った。それからというもの、自分の近くに妻や子供らが来るだけでも我慢ができなかった。家族の体臭に辟易したのである。同じコップから水を飲むなどは言語同断だった。多少とも貯金ができて、最初にガリヴァーが買ったのは、まだ去勢されていない若い雄馬二頭で、この二頭に立派な馬小屋を作ってやって、大切に飼っていた。馬の次にガリヴァーが可愛がったのは、馬の世話をする馬丁だった。馬小屋で働いているうちに馬丁にしみついた馬のにおいをかぐと、ガリヴァーは忽ち生きがえった気持になるのだった。ガリヴァーは馬たちと日に四時間くらいも会話することにしており、馬と話しているときにのみしみじみと幸福感を味わうというのである。

このように、フイーヌムの国から帰国したガリヴァーは明らかに精神に異常をきたしている。彼は明かに人間の環境に適応できなくなってしまったのである。もちろん『ガリヴァー旅行記』はそこで終らず、まことしやかな、結論めいた、ガリヴァーの意見をあれこれと付け加えているが、それが精神異常者のたわごとでないという保証はどこにもない。このように考えると、『ガリヴァー旅行記』というのは実に不思議な物語だといえる。結局、読む人それぞれが結論を出すしかないのであろう。

5

『ガリヴァー旅行記』から必然的に出てくる問題の一つを提出することによってこのエッセイを終ることにしたい。それは第四航海、すなわちフイーヌム国渡航記の意味についてであるが、人間はすべからくフイーヌムのように理性を磨き、平和で平等で争いのない社会を作るべきである、ということであろうか。それとも、フイーヌムの社会は平和かもしれないが、動きの停止した社会であり、従って何の進歩も面白みもなく、人間が理想とするに足りない、ということなのであろうか。理性的な馬フイーヌムに惚れ込むあまり、ガリヴァーがついに精神異常者になったこと自体が、フイーヌム社会の問題性を示している、ということなのであろうか。英文学者の間で、この問題はいまなお未解決のままなのである。